

# 『 RAFTING ゴムボートでの激流下り 』

40代 OB 柴田大吾

『あんなとこ、どんな気持ちで漕ぐんやろ?』これが全ての始まりでした。

1回生の夏頃に同回の部員と映画『激流』を見たときに感じたことです。映画は川下りを舞台に展開されるサスペンスものでしたが、何より強く印象に残ったのは、そのストーリーではなく激流をくだるラフティングのシーンでした。今考えてみるとCG処理がされた映像だったのかもしれない

んが、当時の自分にとっては衝撃的なシーンの連続でした。映画の最後には最難関のガントレット(大試練)という瀬を下ります。主人公の家族達の緊迫感がつたわるクライマックスでした。その時に思ったことです。『あんな瀬をくだる時って、どんな気持ちになるんやろう?』

現役時代は主に河川パートで活動しました。映画のような川に行くこと

はすぐにはかないませんでした。映画で感じた好奇心が“うまくなりたいたい”、“レベルの高い川を下ってみたい”という思いに繋がっていったように思います。ラフトボートを背負ってはメンバーとともに保津川から長良川、飛騨川、利根川、吉野川と各地で合宿を行いました。激しい川があるとの情報を得て岩手県にまで行ったこともあります。ネパールで



日の丸を背負いラフト世界大会に出場する柴田  
(一番左端が本人)

の遠征計画は途中で頓挫してしまいましたが、2度の現地偵察合宿ではヒマラヤの川で漕ぐこともできました。吉野川でリバーガイドとして技術の向上を図ったこともあります。

レースに関しては、部のメンバーと国内の大会に参加したり、日本代表チームに選抜されては南アフリカ(1999)、チリ(2000)で開催されたラフティング世界選手権に出場もしました。卒業後はリバーガイドとして活動し、ラフティングの本場オーストラリアの川で4年間働く事ができました。その後帰国して、現在は日本唯一のプロチームである『ラフティングチーム・テイケイ』に選手として所属しております。

今年の7月に韓国で開催された世界選手権ではアジア初の表彰台とな

る総合3位の成績を収めることもできました。ラフティング中心の生活を送ってくる事ができました。

『瀬をくぐる時の気持ち』。今までたくさんの川をたくさんのメンバーと下ってきました。今考えてみるとその時々で様々な感情をもって漕いできました。最初の頃は家に無事に帰りたいという気持ちもあったし、或る時は後輩達を無事に連れて帰る責任感であったり、或る時は技術的なことのみを考えていたり、レース中はとにかくボートをロス無く進める事であったり。感謝の気持ちをもって漕いでいる時であれば、マイナスな気持ちが出てしまった時もあったり。今はまだ感じた事の無い気持ちで漕ぐ事もこの先にはあると思います。自分の場合は映画で感じた好



2007年ラフト世界大会(韓国)でアジア人チームとして史上初の表彰台へ。歓喜のガッツポーズ

奇心とその後の活動に大きな影響を与えてくれました。そこで現役の部員に伝えたい事。どんな事でも自分がやりたいと思う事をとことん楽しんでやってほしい。はやく見つける事ができた人はラッキーだと思う。仲間と悩んで努力し

て、時には先輩のアドバイスも聞いて計画の実現を果たしてほしい。なかなか見つける事ができない人。そんな人はまず『できる事』を見つける事。どんな事でもやっていく事は大切だと思う。何かを続けてやっていく中で色々な人に会って話を聞くことができる。世の中にはたくさん面白い人が転がってます。どんどん部室から外にでて活動してほしいと思います。関大探検部は今年で50周年です。たくさんのOB・OG、現役のメンバーがおります。お互いに面白い活動を続けて刺激しあえる関係であればいいと思います。

最後になりましたが、このような場でメッセージが書かせて頂きまして、誠にありがとうございました。田口さん始め、編集に携われた皆さんに感謝いたします。

今後とも宜しくお願い致します。  
(40代OB)

編集者注：現在、探検部時代に川に出会い、卒業後は主にラフティングガイドで生計をたてているOBはこの柴田君以外にも数名います。

ラフターズ協会にも籍を置き、ラフティング普及に向けた講習会などを主催しつつ、レースへ出場する

